

序に寄せて

1967年Dudrick, S. J.により中心静脈栄養法（完全静脈栄養法, total parenteral nutrition : TPN）が発表されてから今年でちょうど40年である。また、同じ頃アメリカで Greenstein, J. P.らによりchemically defined dietとして開発が進められていた成分栄養剤がWinitz, M.らによってVivonex®として市販され、enteral hyperalimentationという概念がでてきた。TPNはまたたく間に全世界に普及し、日本では'70年に東北大学の葛西森夫教授が中心となり「完全静脈栄養研究会」が設立された。しかし、経腸栄養法の普及は1980年代になり、多くの低残渣食（low residue diet : LRD）が開発されてからである。本邦では近年経腸栄養法が普及しつつあるが、いまだに静脈栄養法が多く使用されている。これらの経緯をふまえ日本静脈経腸栄養学会（JSPEN）では'99年にTNTプロジェクトを、そして2001年にはNSTプロジェクトを設立し、若手医師を初め、コメディカルの臨床栄養に対する啓蒙と卒後教育を全国的に展開することになった。

これらの努力の結果、'06年4月の診療報酬改定により、「栄養管理実施加算」が新設された。これは入院基本料に「12点」が加算されるものである。厚生労働省もはじめて栄養療法の重要性を認め、「栄養療法はすべての疾患の基本的な治療の一手段である。」ことを今後の日本の診療の基本指針としたことで非常に重要な意義を持っていると考えられる。

このたび、羊土社編集部の方から臨床栄養に関する著書をだしたいので、その編集企画をお願いしたい、という依頼があった。私も約30年臨床栄養の研究に携わり、数多くの教科書を見るもなかなか基礎的なことから、ベッドサイドでの具体的な手技的なことまで網羅している教科書が少ない。そういう意味ではこれまでにないものを企画したいと思いお引き受けした。栄養不良の定義からはじまり、栄養不良がもたらす不都合な問題、そして物質代謝はもちろんのこと、侵襲時の身体の代謝変動、そして栄養に最も関係する免疫と腸管の関連などにつきわかりやすく解説していただいた。さらに、近年話題のプレ&プロバイオティックス、アンチエイジングとアンチオキシダントを含め、個々の重要な疾患の具体的な栄養管理について記述していただいた。金谷先生には食事・調理の科学について企画をお願いし、臨床栄養に関するほとんどの問題点につき従来のエビデンスから最新のエビデンスまで幅広く記載していただいた。本書はドクターだけでなく、コメディカルの方々にも興味をもって利用していただけるようにそれぞれの項に重要な事柄をキーワードとして別に解説をお願いした。現在実際に臨床の場で活躍していらっしゃる新進気鋭の方々およびベテランの先生方に執筆をお願いしたので、各項目が非常に具体的な記載になっている。本書がコメディカルの方々をはじめ、これから臨床栄養を勉強しようと考えている医師の方々にも、臨床の現場においてすぐにでもお役に立てるものと確信している。また、発刊にあたり、羊土社の編集部の方々には非常に的確な校正とイラストを作成していただき御礼申し上げます。

2007年6月

編者を代表して
大熊利忠